

論文

聖書に記される植物—表象とその思想

伊藤 信博

1. はじめに

その昔、『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』の映画をみていて、クリスマスの日、ポッターが好きな女の子であったチョウ・チャンと初めてキスをする時、背景に突然宿り木がスルスルと現れて、驚いたことがあった。ケルト信仰では、宿り木は神聖であるし、イギリスでは、クリスマスには、今でも宿り木を飾ったりする。そして、その信仰によれば、クリスマス日の宿り木の下では、キスも許される。したがって、そのための演出であったろうと思った記憶がある。

旧約聖書『創世記』の冒頭には、天地創造が描かれ、光から始まり、昼、夜、空、大地、海、植物、太陽、月、星、魚、鳥、獣、家畜、そして、最後に神に似せた人間が創造される。その中で、植物は太陽の前に創造されている。そして、聖書には、約90種類の植物が何らかの比喩などで紹介されている（『聖書の植物』、H&A・モルデンケ、八坂書房、1981年）。

ところで、イヴが蛇に唆されて、「善悪を知る樹」に実る果実を食べたとされ、その果実は「林檎」と我々は思っているが、聖書に記されるのは、「杏」であろうとの説もある。ミルトンの『失樂園』によって、「林檎」と同定されるとされるのであるが、かなり後代である。パレスチナやシナイ半島近辺は、その当時、野生の林檎も含め、栽培には適さない気候であったのは、間違いないが、林檎であれば、土地のイメージはかなり変わってくるであろう。

一方、知恵の実を食べた後、無花果の葉で、アダムとイヴは、性器を隠したとされるが、この無花果について、後に付加された花言葉は「実りある恋」である。そして、ローマ神話では、かなりのエロティックさも伴う物語となっている。

ローマ神話の天空神ユピテル（ジュピター）の配偶者で、女性の守護神であるユノ（ギリシャ神話ではヘラ）の別名はルキナ（出産を司る神）、カプロティナ（生殖力）、プロヌビアまたはユガリス（結婚）で、バッカスの祭りには、女性は無花果の首飾り、男性は、同じく果樹園の守護神で、生殖と豊穡を司るプリアプスの像を、無花果の木で彫って、身につけるとされるのである。

日本でも、豆や大根、サトイモなど、栽培された植物は様々な象徴性を持つ。豆は身についた穢れを払い、その穢れを異界に送る職能を持つ。大根やサトイモは、薬であり、豊穡のシンボルでもある。『徒然草』第68段は、薬として朝夕に常食していた「土大根」に助けられる押領使の話を書ける。この押領使の館に人がいない時に、敵が囲み、襲ってきた時、屋敷から見知らぬ武士が二人現れ、敵を追い返す。その二人が「年ごろ頼みて、朝なく召しつ

る土大根らにさぶらう」と述べるのである。

ギリシャやローマでは、果樹栽培や牧畜が盛んであったし、先ほど例に挙げたブリアプスが同時に、牧畜の守護神であったことも象徴的である。そこで、この論文では、キリスト教における植物がどのような象徴性を持っていたかを通して、植物が持つ職能、社会への機能を考察したい。

2. 聖書に描かれる植物が象徴するもの

聖書には、約 90 種類の植物が描かれると上述したが、そのほとんどが生活に直接関わる食物や香料、布の材料、または、祭祀に関わる香油である。食用では、アーモンド、杏（林檎）、無花果、葡萄、ザクロ、スイカ、蓮、豆類、オーニソガラム（オオアマナ）、小麦、大麦、オリーブ、胡瓜などで、やはり地中海地方で栽培される植物が多い。

先ほど記した「林檎」であるが、聖書に記されるヘブライ語のタップーアハ「Tappûach」、ギリシャ語では、メーロン「μηλον」で、林檎の意味もあるが、果物の意味もある。そして、トルコやスイスで、紀元前の炭化した林檎や化石が見つかってはいる。また、林檎の原産地はカザフスタン南部、キルギスタン、タジキスタン近辺といわれている。

この「林檎」は「快適な木陰を作る樹木、見た目に魅力的な果実、甘い、香りが良い、回復機能がある、金色、銀の葉に実る」などの表現が聖書には使われている。しかし、「林檎」の野生種は、聖書に表現されるような味ではなく、栽培種でも、甘くも香りも良くなく、今の西欧で「林檎」を食べた経験がある人なら、すぐに分かると思う。酸味が強い品種が多く、パイに向いているのである。

この聖書表現からは、むしろ、杏に近く、ヨルダンやレバノンでも多く繁茂し、生産高も多い果実である。地中海沿岸地域でも多数栽培され、庭に杏の樹があり、デザートとして、自分自身が摘んで食べた経験もある。また、聖書に記される植物は、人々に非常に身近な植物を記している。

例えば、聖書に記されるアーモンドであるが、春は暖かで、夏は暑く、乾燥し、秋は穏やかで、冬は雨が多い地域が栽培に最適である。したがって、地中海性気候が植生環境に適しているといえる。シナイ山麓から、ギリシャを中心とした地中海沿岸に栽培が広がっていたと考えられるのである。このような事実から、林檎ではなく杏と考えられるのである。

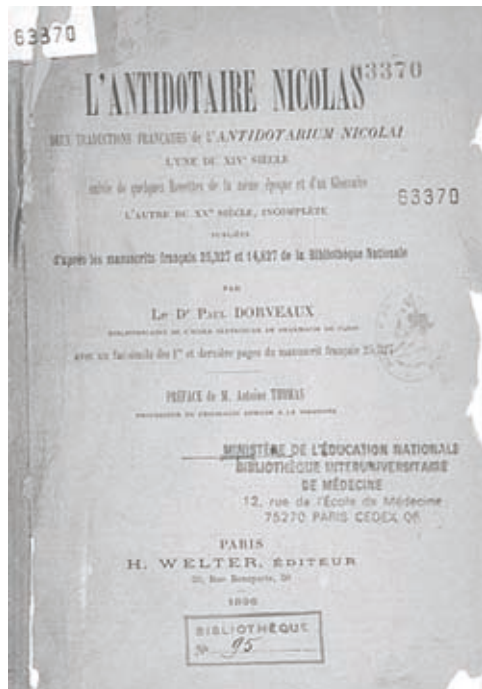


図1、『l'antidotaire Nicolas』、Bibliothèque interuniversitaire de médecine, Paris 所蔵本

ところで、アーモンドに関しては、篠田知和基氏が、ギリシャ神話におけるアティス神がアーモンドから生まれた植物神で、死後の復活は松の木であったと記す（『世界植物神話』15頁、八坂書房、2016年）。フェリックス・ギラン『ギリシャ神話』（202頁、青土社、1982年）では、死後の復活は樅木とされ、アティス神を祝う春の祭りでは、血みどろの手足を切断するとする行事を行い、その後の蘇生を祝う。

日本にも松や竹などは永遠の命を象徴するが、アーモンド生産が盛んなこの地域における、血を伴う植物神の再生儀礼であり、永遠を象徴する松や樅の木がアティス神を象徴するの、自然と思われる。また、ギリシャ人にとっては、蔦も重要で、バッカスに捧げる豊穡の祭りでは、蔦を捧げた。ローマ人は、豊穡の祭りには、柊を使った例もあり、どちらも『聖書』に記される植物であり、常緑樹であることも共通している。

聖書には、その他、薊、キョウチクトウ、瓜（コロシントウリ）、ユリなども記されるが、薊は、棘があるが、棘を取り除き、血を清めたり、酒に浸し、黄疸の治療に使ったりなど、医薬的な効果を持つ。キョウチクトウは、現在もヨルダン渓谷に茂みを持つほど繁茂しており、強心剤となる植物である。また、瓜（コロシントウリ）は、西アジアを含めて、地中海地域に生息する植物で、食用ではなく、下剤として使用されている。

こうした薬としての植物は十四世紀および15世紀にラテン語で記された『l'antidotaire Nicolas』（図1、フランス国立図書館所蔵、写本25327と14827のラテン語からの仏語翻訳本、1896年版）にも薬用としての記録が残っている。イスラム文化の影響を受け、医学や解毒の書として成立したもので、最初の本は7世紀には成立したとされる。そして、この本では、83種類の解毒法を記すのである。

ところで、聖書に記される「ユリ」であるが、上述したH&A・モルデンケは、一般に我々が考えている「ユリ」ではなく、アネモネまたは、カミツレと考察している（15～16頁）。色は、赤色が多く、黄色、青色、紫色の品種もあるとするのである。つまり、我々がイメージする「白いユリ」のイメージはないのである。

「聖母マリア」に捧げるため、中世ルネサンス期では、ポッティチェリやコレジオなど多くの画家が純潔を象徴し「白いユリ」を描いたが、そのイメージとは異なるのである。教皇布告（1618年）以降には、聖母マリアの髪の色、眼の表情、白い着衣と青の襟飾り、そして、画の装飾として、「白いユリ」を描くこと



図2、ナダル作（Adnotationes et méditationes、1595年から）。受胎告知。中央にユリが描かれる。

が強制されようである（図2参照）。

少なくとも、我々のイメージでは、「白」は、純潔の象徴とされるが、近代以降のイメージであり、東アジアでは、「白」は葬式など「死の色」でもある。なお、ローマ人は、アネモネを、熱病を癒す薬として使っており、また、死者に送る花でもあった。西欧の中世以降に、「死」から「純潔」の象徴と変わる変化は大変興味深い。

ところで、フレーザーが記した『金枝編』は、イタリアのネミにおける宿り木信仰から始まったとされる。「ディアナ神を讃えた聖所には、聖なる一本の樹(宿り木)があり、枝を折るのは、禁止されていた。そして、「森の王」と呼ばれる祭司がいた。逃亡した奴隷だけがこの職に就けるが、この金枝を折ることと、現職の司祭を殺すことがその条件である」とするこの物語の神であるディアナは自然の神とされ、小枝を持つ神または小枝その物で象徴され、描かれることが多い。

ベルリンの古代博物館には、小枝と鉢に入った果物を持つディアナ神が描かれる飾りが蔵されており、ノッティンガムのキャッスル博物館が所蔵するディアナ神は、葡萄と葡萄の葉の冠を付けた頭部、ヴァチカン宮殿が所蔵するディアナ像では、葡萄が捧げられている。上述した果樹園の守護神で生殖と豊穰を司るプリアプスが、牧畜の神でもあったように、ディアナ神も植物の神だけではなく、牧畜の神ともみなされていた。豊穣とつながる安産の神でもあった。

伊藤慎吾編『妖怪 憑依 擬人化の文化史』（笠間書院、2016年）でも記したように（289～290頁）、月の神であるアルテミスとその双子の兄である太陽神アポロンは、家畜の守護神とされ、アルテミスは、豊穰の神ともみなされる。そして、南フランスのサント・マリー・ド・ラ・メールでは、5月に、三人の「マリア」、(マグダラのマリア、マリア・サロメ、マリア・ヤコベ)とともに、アルテミスに豊穰を祈る儀礼がおこなわれる。また、8月15日の「聖母の被昇天祭」にも豊穰を祈り、火祭りをおこなう。

アルテミスは、このように聖母マリアを祈る「聖母の被昇天祭」と習合し、豊穰を祈る葡萄や他の果実を守護するため、8月15日に司祭に祝福される儀礼がギリシャにも残存する。また、果樹園や農園には守護するアルテミスの像もある。そして、イタリアにおけるディアナ神も、ほぼ同時期の、8月13日に、この神を祝う祭りをを行い、アルテミスと同様の職能を持つのである。

このディアナは、上述したように葡萄で表象される例も多いが、聖書における葡萄は、多くの象徴的な意味を持つ。イエス自体が「本当の葡萄」、弟子が、「本当の葡萄の枝」、ユダヤ人を「エジプトからもたらされた葡萄」などと表象される。

聖書では、ノアが葡萄の最初の栽培者であるような表現も『創世記』9章に現れ、洪水を逃れたノアが葡萄を栽培し、葡萄酒に酔って、裸で寝てしまうなどとされる。「約束の地」であるパレスチナは「小麦と大麦、無花果、葡萄とザクロ」の国と表現されるが、パレスチナには、岩にワイン圧搾に使った跡や貯蔵の跡がみられるように、この国では、葡萄や葡萄酒が古くから作られたことがわかっており、生産高も高い。

『聖書の植物』の著者であるH & A・モルデンケによれば、聖書の時代の葡萄畑は、柵に葡萄を這わせるなどの単純な栽培や丘の上での栽培で、壁か生垣を蔓で巡らせ、猪やジャッカル、狐の侵入を防いだと記す（149頁）。しかし、これらの動物の中で、猪は根を食べるが、ジャッカルや狐は人間の食べ残しや腐肉食が中心であるため、葡萄畑で守るというより、その畑には、人間の住居もあり、家畜もいたからであると想像できる。その理由から、葡萄の蔦は、豊穡の意味も持ち、人間を守る象徴的な意味も付加された可能性が高いことがわかる。ディアナ神が、葡萄やその蔦で表現されるのも当然であろう。

このように、聖書に表現される様々な植物を考える時、日本において、「記紀神話」や『風土記』に記される五穀などの植物とは相違があり、地中海気候に適した、特に果実栽培、牧畜、小麦などではあるが、それぞれ、農耕文化における「生と豊穡」の祈りが、巧みに表現されていると感ずることができるのである。

3. 西欧中世における植物が象徴するもの

ルネッサンスに至るまでの西欧には、鶴と戦う矮人種（ホメロス）、人狼、巨大蟻、羽のある蛇、フェニックス、グリフォン、犬頭人種（ヘロドトス）、ユニコーン（クテシアス）など不思議な生き物の存在が数多く指摘され、描かれてもいる。

上述した伊藤慎吾編『妖怪 憑依 擬人化の文化史』でも指摘したように（294頁）、キリスト教の世界観では、神が全てを創造したのであり、例え、人間からみて、奇異な生き物であっても、神の意思であり、創造物でもある。また、万物の頂点に立つ人間が克服できるもの、制御できる生物と考えられていたと理解できる。

一方、ルネッサンス以降は、このような奇異な生き物は、悪魔との関係から解釈されるようになる。そして、その出現は、神の警告とも捉えられ、頂点に立つ人間へ神への怒りや人間の「罪」の象徴とも捉えられるようになるのである。

その顕著な変化は、前掲書（298～299頁）で指摘した、「二元論」が強く表れる16世紀の神秘主義の発展以降であろうと考えられる。したがって、ゴシック期までは、まだ、豊かな奇異な生き物の物語など、興味深い表象文化が残っていたことになる。

13世紀初頭に成立したゲルウァシウス『皇帝の閑暇』（『西洋中世綺譚集』、池上俊一訳、1997年、青土社）には、植物に関するいくつかの綺譚が記されている。第4話では、イングランドやフランスのアルルに、木を切り倒し、河に置き、留めておく、または、土地に埋めておくと、岩のように固くなる木の存在を記す（29頁）。第5話では、パレスチナの五つの都市の一つである、ソドムに、時を選ばず成長する果物があるが、完熟の時期には、灰と煙になると記す（30頁）。

また、洗礼者ヨハネが生まれた六月二十四日の祝日が近づくと、鈴生りに、葉と実を付ける胡桃の樹（第11話、39頁）の話など、全部で、植物だけでも、13話ある。それ以外にも、水や泉、杖、石など無機物の話も多く、腐らない肉などの綺譚もある。植物、無機物、金属などの関わりやその象徴など非常に興味深い。

成立する歴史的背景など、様々な要素を加味しないと、明らかには分析はできないが、ソドムの果実に関しては、硫黄と火によって滅ぼされた、「ソドム」を象徴するようにも思えるし、洗礼者ヨハネの物語に関しては、ヨハネのキリスト教会における位置が、旧約聖書時代の最大の預言者であり、イエスの到来を告げる役割を持っていたことから、その誕生を祝福するための象徴が「胡桃の樹」の繁茂であったとも考えられる。

第124話なども、ナルボンヌ大司教区に、司教所有の葡萄の樹があり、どんな動物も食べられないほど不味い葡萄であるが、極上のワインができると記す(263頁)。この話も、司教所有の葡萄という象徴的な意味があり、司教への祝福譚、さらに、ワインは「キリストの血」であるから、その象徴とも捉えることもできる。

第123話は、日本の「般若湯」のような話で面白い。カンタベリー大司教管区のファヴァシャム修道院が持つ領地に、灌木がある。この灌木は成長すると、あちこちに瘤が生じる。この瘤には、やがて雛が孵り、ガチョウのような大きさの鳥になる。そして、四旬節には、人々は、その鳥を炙って食べると記す(262頁)。性行為の禁止や肉食の戒めもある四旬節は、悔悛し、キリストの受難や復活を思う最も重要な祭日である。その時に、肉食するのであるが、その理由が植物から生まれたから植物と解釈しているのである。

一方、第105話では、アダムの罪を惹きおこした果実の樹の枝がエルサレムで大きな樹に成長し、人類の墮落の原因のその樹によって、キリストの磔刑の十字架が製作されたとし、その理由が、キリストが人々の罪を背負い、救いを見いだすためであったと記す(234頁)。十字架は、人々の贖罪を象徴し、その罪を一身に受ける形で、キリストが磔刑になるとの構図である。しかし、この話は綺譚とされることから、当時の人々は、そのようには思っていなかったと想像できる。

1996年版『Dictionnaire des symboles』(表象辞書、Edition, Jupiter, Paris)には、神秘主義の十字架と題され、紀元後1世紀辺りに、石に掘られた十字架に(321頁、右上)、蛇がまわりついている作品が紹介されている。また、同じ構図の家紋が『紋章が語るヨーロッパ史』(浜本隆志、八九頁、白水社、1998年)にも、紹介されている。聖書は、「エデンに一つの園を造り、中央に「生命の樹」と「善悪を知る樹」を植える。そして、「エデンからは川が流れ、園を潤す。その川は、園からは、四つの川となる」と語る。先ほど例に挙げた綺譚は、このように聖書が語る「善悪を知る樹」とも考えられるのである。

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂のモザイク画はその情景を描き出す。上部には、4世紀に描かれた九人の天使に囲まれた上半身のイエス、下部には、13世紀に付け加えられたとされる十字架が天まで届くように描かれ、その下から4本の川が流れ出て、キリストが洗礼を受けたヨルダン川に注ぎ込んでいるのである。

上述したように、人類の墮落の原因の樹をキリストの磔刑の十字架に使ったとするなら、この十字架は、「善悪を知る樹」であろう。そして、天にいるイエスは、人類の全ての罪を、その樹を象徴として、受け取った存在として描かれると理解できる。

一方では、この樹は「生命の樹」で、その樹で、十字架を作ったため、永遠を象徴すると

もいわれている。若桑みどり氏は『薔薇のイコロジー』（99頁、青土社、1989年）で、このような「命の樹」信仰から制作された例として、パリ国立図書館蔵の象牙板の磔刑図が、十字架の左右に「水」と「大地」を象徴する寓意像を配置して、十字架が一本の樹木で、その樹は「命の樹」とあると論証している。図三のような、ゴシック建築の大聖堂は、天にいるキリストに向かって、「生命の樹」が成長して延びていく様子を、永遠を象徴するように示しているとも考えられる。

ところで、樹木は西欧の中世人にとって、何を象徴していたのであろうか。『ヨーロッパ中世象徴史』（ミシェル・パストゥロー、篠田勝英訳、83頁、白水社、2008年）は、13世紀のキリスト教神学者であるアルベルトゥス・マグヌスの言説から、「木には、節や成長の痕や、裂け目や虫食いの穴が観察できる。人間と同じように、苦しんだり、朽ち果てたり、傷ついたりする。また人間並みに虫がわいたりする」と紹介している。

四季と共に、成長し、やがて枯れ、土に帰る。水を必要としたり、場所も選んで育ったり、再生する様子は、金属や土壌など、他の物質とは違うと考えているのである。そして、そのような木から造られた像が泣いたり、話したり、動いたり、血を流したりすると紹介もするのである。

このような、樹木のイメージは、木を加工する職種、例えば、大工や木工職人、例に挙げた像のように、加工された木製品にも影響を与える。つまり2章で述べてきたような、「死と再生」や「豊穡」のイメージと同様なイメージが重なるのである。しかし、『創世期』の第3章（17～24）では、以下のように叙述する。

「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地は、あなたのために呪われ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、茨と薊とを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたは、塵だから、塵に帰る。（中略）命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない。そこで、主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎の剣とを置いて、命の木の道を守らせられた。」

大地は、植物を生み、樹木も育てる。この意味では、既に述べたように、大地は、豊穡と再生の象徴でもある。ところが、『創世期』第3章が語るには、大地は、人間の罪により、耕したり、塵となって帰ったりする呪われた場所でもあるのである。このような両義性を持つのが大地であり、一方では、聖なるもの、他方では、現実社会、罪の帰納の結果として、ネガティブな要素も持つのである。

そして、植物や木も、人間と同じような負のイメージを持つに至る。この理由から、「生命の樹」と「善悪を知る樹」と相反する十字架に対するイメージが創造されてきた可能性が

ある。また、十字架の左右に「水」と「大地」が配置されたり、ゴシックの大聖堂がイエスに向かって大きく延びたりしたとしても、罪の象徴として、イエスが受託するとも考えてもおかしくはない。

茨や薊も、大地を耕す人間の邪魔をする負のイメージも持つ。この章で最初に紹介した不思議な生き物、人間、動物など、地上の全ての生き物が、そのような植物に囚われ、苦しむ様子が描かれ、また、キリストを象徴する葡萄が彼らを救ったり、葡萄の蔓が万物を守り、また、天に向かって昇ったりするように描かれるのも、天にいるキリストへの罪の構図や救いを象徴しているのかも知れない。

しかしながら、13世紀以降のゴシックの聖堂などの彫刻には、独自性がみられ、生命の象徴、天を飾るにふさわしい草花が飾られるよう



図3、ストラスブール大聖堂。
高く伸びるその威容さに圧倒される。個人撮影

にもなっている。ロマネスクの飾りが聖書の中の植物とするなら、ゴシックの飾りは、地域性が強いと表現した方が良いのだろうか。植物の描かれ方に、かなり地域性がある。

パリのノートルダム大聖堂では、葉がある植物が多く描かれる。クレソン、オオバコ、キンポウゲ、羊歯、クローバー、おだまき、パセリ、苺、金魚草などで、パリ近郊、一般にいわれる、イル＝ド＝フランス（Île-de-France）で、春以降に採取される草花ばかりである。その描き方には、生命の謳歌があり、喜びが強く、「生命の樹」が、天高く昇る姿も、想像できるようなきらびやかさを持っている。

したがって、時代差によって、その解釈が変わってきたのかも知れないが、「死と再生」をイメージする植物への観念や、十字架がケルビムに守られた「生命の樹」によって作られたと考える人々、さらに、原生林の開拓や生産性の向上で、穀物生産などの拡大が始まる西欧の13世紀の世界との関わりの中で、教会に描かれる植物の象徴性を再考察する必要性を感じている。

4. おわりに

フランス語では、「フォーレ」は、「原生林」と訳すのが良いのであろうか、人間がまだ整備し、秩序を正していない森を指し、この森は、好ましくない状態、否定的な意味合いも持つ。樹木が森を形成し、蕨がその樹木に巻き付くような状態は、人間が秩序を成立させていない、好ましくない状態でもある。

その好ましくない状態が、神の代理である人間によって、徐々に整備され、好ましい状態

に変わっていく時、「カオス」から、神の望むような秩序が導かれる。新しい秩序は、謳歌される状態となり、ギリシャやローマの古典のような「死と再生」、「豊穡の祈り」も生まれてくるであろう。13世紀はそうした過渡期で、今回は論じなかったが、過去とルネッサンスを結ぶ「物語の宝庫」でもある。さらに、字数の関係上、植物の色について、また、オウィディプスの『転身物語』における植物表象などを論じなかった。機会があれば、是非考察したい。

最近、自宅で、子供たちが『マレフィセント』というアンジェリーナ・ジョリーが主演する映画をみていた。ちょうど、葡萄の蔦のような兵士が擬人化され、描かれており、人間界と妖精界を別ける壁を守護していた。ふと、その蔦の擬人化に興味を覚えたのであるが、制作者は、蔦が象徴する防御の象徴性や逆の意味である罪の象徴をわかっていて、描いたのか気になって仕方ないのである。

なお、図1は『L'antidotaire Nicolas.』の表紙で、Bibliothèque interuniversitaire de médecineが所蔵、図2はジェローム・ナダルが製作した銅版画「受胎告知」(102頁)、『Adnotationes et méditationes』、Saint Joseph's University Press, 1999年で、1595年に出版された作品の1607年再版版から引用した。図3は、フランスのストラスブール大聖堂で、個人の撮影である。

